

第15回日米文化教育交流会議（カルコン）日程
（1991年3月13日（水）、14日（木））
（於 外務省国際会議場751号室）

3月13日（水）

- 9:30 開会式
- 10:00-10:50 第1セッション（日米のコミュニケーションの改善：
改善上のプライオリティーは何か）
- 10:50-11:00 コーヒー・ブレイク
- 11:00-12:00 第2セッション（知的交流の拡充）
A. コミュニケーションの改善のため研究、研究成
果の公表及びその活用
- 12:30 佐波日本側パネル委員長主催午餐（於 アークヒルズ・クラブ）
（出席者：日米双方のパネル委員）
- 14:00-15:30 B. 知的交流の推進
- 15:30-15:40 コーヒー・ブレイク
- 15:40-16:30 第3セッション（より良きコミュニケーションのため
の新たな施策について（注）知的交流以外）
- 18:30-20:30 外務政務次官主催ブュッフェ・ディナー（於 飯倉公館）

3月14日（木）

- 9:30-10:30 第3セッション（続き）
- 10:30-10:40 コーヒー・ブレイク
- 10:40-12:00 円卓会議（日米関係の中の財団の役割について）
- 12:30 米大使主催午餐（於 米大使公邸）
（出席者：被招待者）
- 14:00-15:00 総括セッション（カルコンの役割と今後の活動につい
て）
- 15:00 閉会式
- 15:30 日米共同記者会見（於 751号室）

日本側出席者名簿

(日本側パネル委員)

(委員長)

1. 佐波正一 (東芝相談役)
2. 天城 勲 (文部省顧問)
3. 平泉 涉 (衆議院議員)
4. 本間長世 (東京女子大学教授)
5. 奈良靖彦 (講談社顧問)
6. 野村忠清 (国際交流基金専務理事)
7. 小倉和夫 (外務大臣官房文化交流部長)
8. 長谷川善一 (文部省学術国際局長)
9. 倉橋 健 (早稲田大学名誉教授)
10. 石原秀夫 (日本興業銀行取締役副頭取)
11. 小笠原敏晶 (ジャパンタイムズ代表取締役会長)
12. 岩男 壽美子 (慶應義塾大学教授)

(オブザーバー)

(五十音順)

1. 馬 瀬 宏 日本万国博覧会記念協会部長
2. 梅 津 至 日本国際問題研究所所長代行
3. 加 藤 幹 雄 国際文化会館常務理事
4. 上 村 和 子 日米教育委員会交流部部長
5. 近 藤 有 直 東芝国際交流財団専務理事
6. 高 橋 一 生 笹川平和財団
7. 出 口 正 之 サントリー文化財団主任研究員
8. 山 口 日出夫 トヨタ財団常務理事
9. 山 本 正 日本国際交流センター理事長

米側出席者名簿

(パネル委員)

ジョン・メイキン
(委員長)

リチャード・ソロモン
クリスファー・クロス
ウィリアム・グレイド
エレン・フロスト

ステファン・グランツ

ロイド・カイザー
ケネス・パイル

ウィリアム・シュナイ
ダー

ジョン・ツー

ロバート・ティレル

アメリカン・エンタープライズ・
インスティテュート財務政策研究部長
国務省東アジア・太平洋担当次官補
教育省教育研究・改善担当次官補
USIA教育文化担当次長
ユナイテッド・テクノロジーズ国際
部長

サリヴァン・クロンウェル法律事務所
パートナー

WQED会長

ワシントン大学歴史・東アジア学教授

インターナショナル・プランニング・
サービス社長

J・F・ケネディ大学アジア太平洋
研究所教授

「アメリカン・スペクテーター」
編集長

(オブザーバー)

ロン・アクア
アズビー・ブラウン

ジュリー・インマン
ロバート・マーラ

メアリー・マクドネル
ジョン・ウィーラー

ジェラルド・ヨシトミ

米日財団プログラム担当副理事長
アジア文化協議会日本プログラム
担当

アジア財団日本プログラム担当部長
日米友好基金プログラム・オフィ
サー

社会科学学術研究協議会日本担当主任
ジャパン・ソサエティ(ニューヨー
ク)プログラム担当副理事長

日米文化会館専務理事

議長サマリー（仮訳）

第15回日米文化教育交流会議（カルコン）は、1991年3月13日及び14日、東京で開催された。

日米それぞれのパネル委員長である佐波正一氏及びジョン H. メイキン博士が、会議の議長を務めた。会議には、双方のパネル委員が出席した。両国の財団の代表および他のオブザーバーも出席した。

日本国総理大臣及び米国大統領が、カルコンを歓迎するメッセージを送った。

中山太郎外務大臣およびジェームズ・ベーカー國務長官が、日米間の対話と交流がきわめて重要でありこのためにカルコンが積極的な役割を行うことを確信する旨のステートメントを発出した。

「日米コミュニケーション改善を目指して—検証と提言」と題するシンポジウムが、前日に、国際文化会館で開催された。カルコンに先立って行われたこのシンポジウムの主たる結論が報告された。

会議の第1日目の午前に、知的交流の強化につき討議した。議論は語学教育、人的交流及びどの層の人々を対象にすべきかという問題に重点を置いて行われた。

会議では、さらに、知的交流及び知的ネットワークの形成の強化のための方途について検討された。方途としては例えば、両国において進行中の研究についてのクリアリングハウス、草の根レベルでの交流の強化、両国間のコミュニケーションの過程における情報に良く通じた非専門家の重要性に言及がなされた。更に、カルコンの下に、所要の措置について政府その他の関係機関に勧告するため、アド・ホックのタスクフォースを設けることが決定された。知的交流の強化は、日米が重要な世界的問題及び両国がかかえる緊急の問題に共に取り組むために不可欠であるとの認識の一致が見られた。

日本国総理大臣の提唱したコミュニケーション改善構想は、相互理解促進のための積極的な一歩であると認識された。

第2日目に日米の財団の代表者の参加を得て、円卓会議が行われた。この討議は、「財団関係者が日米関係を取りあげる」と題され、資金的支援に関するプライオリティーについての評価が取り上げられ、また、プログラムを企画するためのいろいろなアプローチが討議された。

カルコンは、その任務の遂行を促進するために、新たな体制を採用することとなった。新しい体制については添付文書に記述されている

次回カルコン会議は、米国において、原則として、1992年の後半に開催される。

Chairman's Summary

The fifteenth United States-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange (CULCON) was held in Tokyo on March 13-14, 1991.

The Conference was chaired by Mr. Shoichi SABA and Dr. John H. MAKIN, Chairmen of the Japanese and United States CULCON Panels. Members of the two panels attended the Conference. Foundation representatives and other observers from both countries also attended.

The Prime Minister of Japan and the President of the United States sent messages welcoming the CULCON Conference.

Foreign Minister Taro NAKAYAMA and Acting Secretary of State Lawrence EAGLEBURGER also delivered statements underlying the significance of dialogue and interchange between Japan and the United States and expressed confidence in the positive role CULCON would play in this regard.

A symposium entitled "Initiatives for Improving Japan U.S. Communication", organized by the International House of Japan, was held on the previous day. Major findings of this pre-CULCON symposium were presented.

The morning of the first day, the Conference addressed the question of increased intellectual exchange. Discussions centered on language training, exchanges of persons and identification of priority audiences in both countries.

The Conference also discussed ways and means to enhance intellectual exchange and networking such as a clearing house for research in progress in both countries, increased exchanges at the grass roots level, and the importance of well informed laymen in the bilateral communications process. Furthermore, it was decided to establish, under the auspices of CULCON, ad hoc task forces for specific recommendations on necessary measures to Government and other bodies. It was generally recognized that increased intellectual exchange was essential in order that Japan and the United States commonly address critical global issues as well as pressing problems shared between them.

The Communication Improvement Initiative proposed by the Prime Minister of Japan was viewed as a positive step toward better mutual understanding.

On the second day, a round-table discussion was held, with the participation of U.S. and Japanese foundation representatives. During the discussion, entitled "The Foundation Community Looks at Japan-U.S. Relations", participants gave their assessments concerning funding priorities and discussed various approaches for program development.

The CULCON adopted a new structure to expedite achievement of its goals. The new structure is described in the attached document.

The next, CULCON Conference will be held in the United States, in principle, in late 1992.

Towards A Stronger CULCON

More people in Japan and the United States are coming to recognize that we live in one world. Yet cultural differences are not generally understood. People are taken by the differences and unable to see what is in common. This gap in mutual understanding impedes cooperation between Japan and the United States, and constitutes a major challenge for globalization on the planet.

This challenge was, of course, substantially the same in 1961 when CULCON was organized and in 1968 when the current American/Japanese committee structure was established. Nevertheless, CULCON needs to become more active in order to address the challenge in the 1990s.

CULCON's mission is twofold: to provide (i) oversight with respect to the U.S.-Japan cultural and educational relationship, and (ii) leadership in promoting appropriate action. Such oversight requires monitoring existing programs and identifying priorities. A first step would be to commission status reports on the current state of cultural and educational interaction between Japan and the United States in specific areas. There should also be on-going reports on programs and trends. Communication would be maintained by Secretariats and by interim meetings between the Co-Chairmen of CULCON and other panel members as appropriate.

Leadership should be exercised in calling attention to priorities and actively promoting new initiatives, particularly where binational action is required. The CULCON biennial plenary should be devoted to identifying specific areas in which initiatives are required. CULCON should sponsor or encourage binational conferences on specific issues

from time to time as needed. In every case these should be (i) thoroughly prepared to present documented background reports on the issue considered, (ii) headed by ad hoc panels of leaders and experts whose collective voice will give significant weight to their findings and recommendations, (iii) publicized by media coverage arranged in advance, and (iv) followed up by a printed report with a detailed action plan to insure effective communication to policy-makers, the media and general public.

Specific Recommendations

The following measures should be taken to implement CULCON's twofold mission:

- Establish Japanese and American Secretariats with directors and necessary clerical support to handle correspondence, reports, meeting agendas, etc.
- Instruct the Secretariats to commission status reports on the current state of cultural and educational interaction in specified areas, subject to obtaining funding where necessary.
- Abolish existing subcommittees and the steering committee, and establish ad hoc task forces to address specific issues as identified by CULCON.

より強力なカルコンに向けて（仮訳）

日米両国では、以前にもまして多くの人々が、自分達はひとつの世界に住んでいるとの認識を持つようになってきている。しかし、文化の違いが一般的に理解されているわけではない。人々は相違点に気を取られる余り、共通点を見ることができなくなっている。相互理解の上でのこのギャップが日米間の協力を妨げ、世界におけるグローバリゼーションの進展に対して課題を提起している。

勿論、1961年にカルコンが組織され、1968年に現在の日米の委員会の体制ができた当時においても、この課題は実質的には同じであった。しかし、1990年代の課題に対応するためにカルコンはより活動的にならねばならない。

カルコンの任務は以下の2つである。

- (1) 日米間の文化教育関係を注意深く見守ること
- (2) 適切な行動を促進するために指導力を発揮すること

「注意深く見守る」ためには既存のプログラムをモニターし、プライオリティーを明確にしなければならない。第一のステップは、日米間の特定分野における文化・教育交流の現況についてのレポートを作成させることである。さらに、プログラム及び動向に関する現況報告も必要である。事務局並びにカルコン両議長及び他のパネル委員による中間的会合も持つことにより連絡を維持していく。

プライオリティーに注意を向けること及び新しいイニシアティブを積極的に促進することに関し、特に両国間の活動が必要とされる場合に指導力が発揮されなければならない。2年毎に開催されるカルコン総会はイニシアティブが求められる分野を明確にすることに専念すべきであ

る。カルコンは時折必要に応じ、特定問題に関する両国間会議を開催または懲慥すべきである。いずれの場合も次のことが必要である。

- (1) これら会議は十分に準備がなされ当該問題、書面によるバックグラウンド・レポートが提出されること。
- (2) 会議の結論、勧告に重みを与えるような指導者・専門家から成るアドホックのパネルが主宰すること。
- (3) 事前の手配によりメディアによる報道がなされること。
- (4) 政策立案者、メディア、及び一般大衆に対する効果的コミュニケーションを確保するために詳細な行動計画を付した報告書の作成によりフォローアップがなされること。

勧告

カルコンの2つの任務を遂行するため、次の措置が取られるべきである。

- (1) 日・米双方に事務局を設置し、事務局長及び連絡・報告・議事日程等事務処理を行うための事務的補助を置く。
- (2) 必要な資金を得られる場合には、特定分野における文化・教育交流の現況報告を作成させる。
- (3) 既存の小委員会及び運営委員会を廃止し、カルコンが確定する特定の問題に取り組むためのアドホックのタスクフォースを設置する。